



ゆるがぬ意志を  
鐘にたくし  
高鳴る情念を  
のみにゆだね  
ひたすら石に向かう

大自然の懐深く  
眠り続け  
黙して語らぬ  
常磐の石に  
今、命を吹き込む

昭和52年11月1日 / 編集・発行 / 岡崎市教育委員会



(石に取り組む一常磐中)

## — 教育随想 —

## 青木嘉夫を凝視する

— 教育への道を求めて —

荻 須 正 義



呼び続けた。教えるということとはとりもなおさず子どもに教わることである。そこに心と心の結びつきの論理を求めたのは、まさに青木君らしい達見であろう。

教育の研究は、よく、はいまわるといふ現象を呈することがある。それは評価のあいまいさに起因することが多い。ある人は高く評価し、ある人は、価値を与えようとしない。この両者の存在が教育の道には必要であり、その両者のまじめな討論によって教育は前進する。

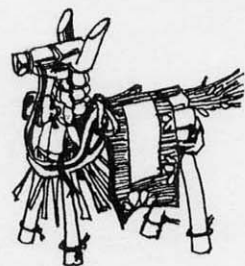
青木君の業績が岡崎の先生方によって討議される時、岡崎の教育は、より確かなものとして前進を続けることだろうし、それが同時に故人を生かすことであり、故人は永遠に生き続けることにもなる。

鈴村教育長はいう、「教育は岡崎にあり」と。わたしは双手をあげて賛成した。教育長の至言を無にしないためにも、青木君の残してくれたこの本を読みなおしてほしい。そしてこの本のいいところや未完の部分をはつきりさせ、さらによりよいものに作りあげていくことが、岡崎のどこかで、地球にこつこつとなされていくことを期待してやまない。

教育の岡崎か、岡崎の教育か、すばらしいほこりをもつことは三河のためにも日本のためにも大切なことだが、それが、塵のほこりにならないことを祈ってやまない。

（東京教育大学附属小学校教諭  
昭12、岡師卒、理科教育専攻）

## 某校某日



「巨人の星」始末記

山田 靖彦

A君のお母さんに道でばったり。

「実は私の家に『巨人の星』が全巻そろっていますので、よかつたら学級のみなさんに読んでもらおうと思ひまして。」

好意をむげに断わるわけにもいかず、さりとしてマンガをすすめるわけにもいかず、もそもぞ……………」

「子どもも何度か読みましたのでもう見ませんし、捨てるのも惜しい気がするの……………」

そのことを聞いて、つい、「それなら、私が読みます。」

と言ってしまった。

翌日、教室に行くと「巨人の星」が机の上に積み上げられていた。

「先生、それどうするの。読むの？」

「先生もマンガ好き？」

「先生、見せて見せて。」

自分たちと同一レベルと思つたのか、とたんに親しそうな顔つきになり、眼が輝く。

「えー。先生の小学校のころは……………」

彼が、男川の校長を最後に逝ってしまったことは、残念でならない。しかし故人を惜しんでみても、故人は喜ばない。故人の業績を生かすことこそ、青木君の真意に沿うことである。思うに教育の道ほど遠く続く道は少ない。多くの人によって積み上げられてきた今もその努力は続けられ、この努力は遠く未来に続き、とどまることはないであろう。その一こまに青木君の業績は輝き続けることであろう。

その宝石は何だろうか。私はいふ、彼は、教育の原点をいつも凝視して、教師像を描き続け、そこに論理を見出し、教育への道を客観化しようと企ててきたことだ。

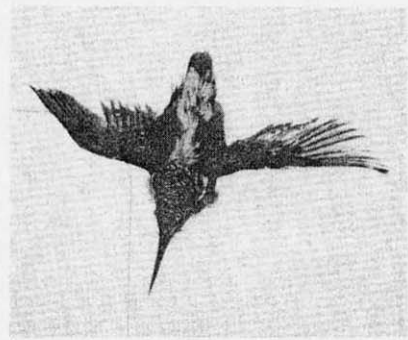
彼は私によく話してくれた。

「とろくさい。そんなことで子どもが育つと思ふか。」

と憤つては話を続けたものだった。そして学級づくりや学校づくりの論理を、心と心の出会いふれあいそして結びつきの中に求めて、最後までたたかい続けた。

それは、男川校の公開研究会の研究報告に十分うかがうことができる。わたしはこの研究書を手にしたとき、そのすばらしさに驚き魅せられ、夢中で読み通したことを忘れることができない。

教育は教へ育てる営みであるが、それは子どもを対象にした言葉である。教育が思うように進まないのは、教師が育ちなやんでいることに原因を求めることを忘れがちになる。子どもが育つときは同時に教師も育つときであることを、彼は



滑空するカワセミ

少年自然の家をとりまく自然環境は、野鳥にとってまだまだ楽天地。数多くの野鳥の生息が確認されていますが、その中で、溪流の水面を生活の間とする野鳥のなかまを紹介しようと思います。

溪流の小魚、水生昆虫を主食にしている野鳥には、カワセミ・カワガラス・ヤマセミがいます。セキレイの類は以前に紹介されているので省きます。これらの野鳥は、カモ・オシドリのような水鳥ではありませんので水かきがありません。口ばしが長く、体の形がジェット機のように、水の中での動作は活発です。

獲物をとるときは、水面上を飛びながら、小魚を発見すると矢のような速さでダイビングし、ものみごとに捕獲します。獲物がとれると木の枝にとまってひと休みしてから、ひなのいる巣に帰りま

が同じ色であるのも共通の特徴です。

◆ **カワセミ** (カワセミ科)

四十二年頃までは矢作川でも見かけましたが、現在では全く見かけません。スズメ大で、「飛ぶ宝石」の名のとおり、コバルト色の羽毛、首から腹にかけての栗色は非常に見事、まさに清流の王者です。乙川・男川には数多く生息しており保護したい野鳥です。パードウィークのころ、ひながかえります。

◆ **カワガラス** (カワガラス科)

カワセミより上流を生息場所にしてい

◆ **ヤマセミ** (カワセミ科)

ハトくらいの大さきで、茶と白のしま模様美しい鳥です。主として山林にいますが、主食が小魚のため清流に現れます。小魚の捕獲はカワセミと同様ですが体が大きいだけにあまりじょうずではありません。四十二年に死骸が発見され、それ以来姿を見せませんでした。五十年から、茅原沢・秦梨・須淵の各町でつぎつぎと発見されるようになりました。本年度の延べ確認数は十二羽になっています。特に警戒心の強い鳥で、雄は頭に冠状の羽毛を持っています。

これらの鳥は、いずれも清流にしか生息できません。特にカワセミは水質汚染の指標鳥にされています。カワセミの姿の見えない河川は、人間にも利用できない川だということになります。空気と水のきれいな環境は、野鳥だけでなく、人間にも必要です。これらの鳥がどこでも見られるような自然を保存したいものです。

(河合中 古田 忠久)



清流の野鳥

ふるさとの自然

少年自然の家シリーズⅥ

調子にのって、身ぶり手ぶりよろしくマンガ談義をくりひろげる。夢中になって話しまくり、ふと時計を見ると、チャイム寸前であった。

(羽根小)

野球部奮闘の記

石原雅充

よその部から猛烈な抗議。

「先生、見て。紫色になっちゃったのよ。」

「こわくて練習できないわ。」

「野球部なんてなければいいのに。」  
まことに手きびしい。運動場がせまく、よく打球があたるので、こんなことがたびたびある。なんとも肩身のせまい野球部である。

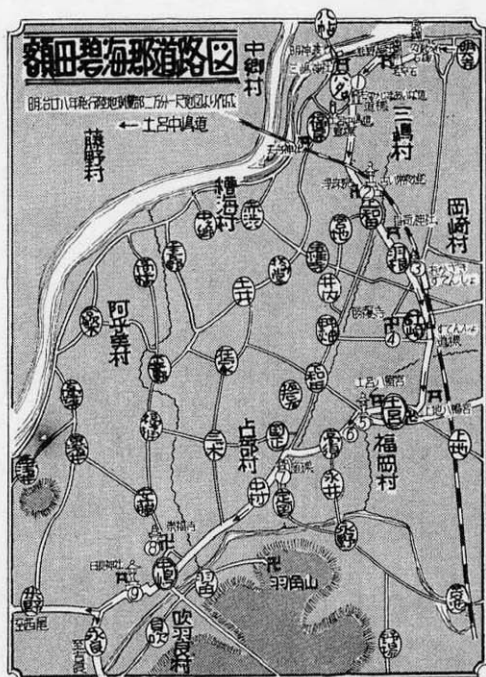
しかし、部員はそんなことにもめげずはりきっている。何とか良い成績をあげて存在価値を示そうとしているのである。この部員の願いを何とか……と思うのだが、なんせ野球の経験ゼロのしろうと監督である。チンプンカンプンな練習をしたり、ルールがわからなかつたり、試合中にサインをまちがえたりで、逆に生徒の足を引っばっている感じがする。

ただ一つの救いは、

「先生のバッティングピッチャーはいいよ。たいしたスピードも変化もないので調整しやすいから……。」

という部員の評価である。このことには気をよくして、三十を過ぎ、衰え始めたからだにムチうって、さっそうとマウンドにたつ私である。

(竜海中)



## ⑥ 南部の旧街道を訪ねて



▲六名小学校校庭に引っ越してきた道標。「左ふくしま」右すごう、ここは「土呂中島道」と記される。



▲昔は牛の爪を切り、今は自転車のガレージに……

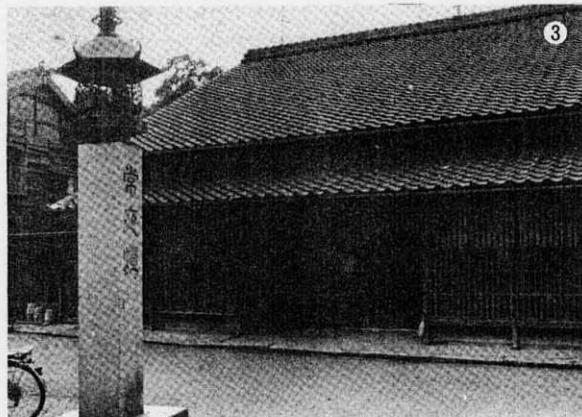
岡崎の城下から、明治二十一年開通した東海道線の駅舎、土呂の蓮如さんの門前町福岡を経て土呂街道を中島に通じ、ここから吉良・西尾に至る古い道筋をたどってみた。

●明大寺から六名へ、熊野神社付近は、かつて土族屋敷であったという。六名小学校南で道が分れる。右は西尾平坂道、左が中島饗場道。八帖から明神の渡しを経て真宮に至る道路の道標（写真①）には土呂中島道とある。

●東海道線の小さなガードをくぐると上和田浄珠院、松平信孝ゆかりの寺である。門前には古びた常夜燈、そして牛の爪切り場が古い街道をしのばせる。（写真②）

●稲荷神社から覚照寺へ、停車場西は、まだ

千本格子がなつかしい駅西の旧道にたつ常夜燈▼



ひと昔前の屋並が多く残っている。明治四十四年建立の常夜燈（写真③）はモダンな青銅製。ここから右に道をとれば、二十数年前架橋の青野橋（美矢井橋の前身）、左が土呂路である。

●月報三十一号で紹介した「右すてんしよ」の道標（写真④）は、この土呂路と野畑（ぬ）ける間道の分岐点に里の人が建てたものである。今は延命地藏とともに勝鬘寺門前へ移動。

●その昔額田第一の町として栄えた土呂は人口千人（明治七年）目ぬき通りは新しい店舗に改装されつつあるが、まだ古い昔のたたずまいをその中に見ることができ。 （写真⑤）



▲街道ぞいに残る旧家の土塀。新町には往時遊廓があった。

占部川神社北の石仏二体。文字は風化して読めない▼



▲赤松父子の墓。則村の孫がこの寺の中興開山という。

日長神社南の曲がり角にたつ常夜燈。文政七年▼



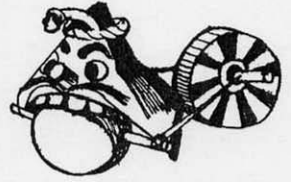
福岡の中心を流れる砂川畔の常夜燈。明治11年建立▲

●土呂街道を南西へ、国正稲荷神社から占部川神社まで、旧道がわずかに残る。古い石仏二体。ひがなはなの赤が印象的であった。  
●中島崇福寺は、かつて十萬石の格式。西尾の殿様も吉長の殿様もここでは下乗したという。この寺にある二基の五輪塔は建武中興に登場する赤松則村・則祐父子の墓だといふ。  
(写真⑧) 他にも古びた墓標が数多くある。  
●中島の三つ曲り、日長神社の秋葉山常夜燈は文政七年(写真⑨)。西尾からの旅人も、吉良からの旅人も、この常夜燈を見て、岡崎も近いとひと汗ぬぐったことであろう。

勝鬘寺前にたつ道標。裏面に「右おかざきすてんしよ」とある。▼



## 教育日々



木彫の時間は、生徒、特に男生徒が活発になる時間である。「起立。礼。」の声がやけに元気よく窓をふるわせた。こんな時は、こちらもフアイトがわいてくる。しかし、この時間にも不安が

ある。刀で手を切り、養護の先生の世話になる者が毎年出るからである。何とか無傷でこの題材を通過させようと努めるが、いつこうになくならない。今年から美術教室はできたのだが、まだ作業用の設備は整っていない。この設備不足が、傷に関係ないと言いきれないところに私の悩みがある。なぜなら、手で材を固定するかわりに、器具で固定すれば、傷の五〇パーセントはなくなるだろうと思うからである。

それに加えて、生徒の持つてくる彫刻刀たるや、木をこする間、これは容易なことではないと直感した。「どうしてそんなに行儀が悪いの。」といえば、「育ちが悪いんですよ。」と照れくさそうにつぶやく子。

## 不親切の策

東海中

ことはできて、彫ることなど思いもおよばないしろものが多し。それを見るにつけてもゾッとする。生徒に教えながら私が研いだりしているが、私の不安はつのるばかりである。が、私は、こう考える。何もかも完璧に準備された中で生徒を活動させるより、不自由を逆手にとってこそ教育だと。「先生、すみません。」と、申し訳けなさそうな顔をしながら、痛みをこらえてではなく、隠して、私のところへやってくる生徒が出ないよう、精一杯話してやる。「生徒諸君、必死に、一時間に取り組んで、木彫を造り出す

木下浩雄



「お早う。」と声をかけても、そ知らぬ顔で通り過ぎて行く。くつ箱があつてもくつは土間に脱ぎっぱなしになっている。体育の服に着替えれば、脱いだ服は乱雑に散らかして行く。集会で並べば勝手に「こそこそする。いつの年にも、何年生を受け持っても、こんな子は必ず数名はいるものである。」

「ご多分にもれず本年の受け持ち三年生の中にも、そんな子が少しいる。始業式後、子供達の前に立った瞬間、これは容易なことではないと直感した。「どうしてそんなに行儀が悪いの。」といえば、「育ちが悪いんですよ。」と照れくさそうにつぶやく子。

## 悪戦苦闘

矢作東小

「脱いだ服は、きちんとたたみなさい。」といえば、めんどうくさそうにそそっかしく積み重ねる子。そして例年のように、わたしの悪戦苦闘が始まるのである。

諸戸しづ子

一に根気、二に根気、その場その場で納得するまで話してやらなければ効果はない。それでもだめな時、わたしは家庭訪問をする。どんないたずらっ子にも必ず長所はある。学校で困り果てていることなど、これっぽっちも口に出さず、ちよつと言い過ぎかなと思うぐらいほめる。たいていの親は信じられないといいつつも、うれしそうに顔をやる。



# 全国・全県レベルの受賞校続く

## 教育文化都市「岡崎」の面目躍如

FBC学校花壇設計図コンクールで、福岡小・葵中が県知事賞・県教委賞にそれぞれ入賞したのを始め、全国・全県レベルの大賞受賞の決定や内定通知が相次いでいる。

喜びにわく受賞校は次の通り。  
■愛知県果花いっばい優良校コンクール

▼県教委賞・細川小 ▼毎日新聞社賞・福岡小 ▼農村中央金庫賞・六ツ美北部小 ▼優良賞・六ツ美中部小の四校。

■NHK全国学校音楽コンクール東海北陸大会

▼最優秀賞・葵中、続いて全国大会へ進む。

■CBCこども音楽コンクール

▼最優秀賞・葵中、続いて中

【寄贈刊行物・資料】  
◇葦毛湿原

財団法人 東海財団発行  
豊橋市東部、多米峠の近くに横たわる湿原は、愛知の「尾瀬沼」と言われる。この湿原の地形・地質や生物を紹介する。湿原生物の研究地として興味がある。B6判二二頁。

◇新しい漢字指導「基本字・複合字」

市現職教育委員会国語部編字源を通し、漢字構成の法則を理解させ、基本となる一字の学習が同時に数個の漢字を習得する根拠となるような系統的漢字指導の一試案として刊行を意図された。A5判八三頁。

### 論文審査

▼優良校・葵中

■岡崎健児全国大会へ雄飛

八月十一日から開催された本年度全国中学校選手権大会に多数の岡崎健児が出場し、優れた成績を取めた。各大会の期日、会場、出場者、入賞結果は次のとおり。

▼第十七回全国中学生選抜水泳競技大会(8月11・12日)岐阜県営プール) 男子四〇〇MR、五位 甲山中、赤堀正司・鎌田好伸・斉藤吉晴・近藤聖一組 男子四〇〇MモデルR、六位 甲山中、赤堀正司・川澄一夫・近藤聖一・角谷守彦組 男子一〇〇MP、二位 矢作中石津隆志。

▼第八回全日本中学生軟式庭球選手権大会(8月18日)東京世田谷総合運動場) 一回戦・不戦勝、二回戦・惜敗、矢作中

生駒明美・山田一乃組。

▼第四回全国日本中学生陸上競技選手権大会(8月13・14日)東京国立競技場) 二年男子一〇〇M、三位 葵中・荻野竜也。

■小学校修学旅行の日程  
市内小学校連合の修学旅行、11月29日から京都奈良方面へ三班編成の各一泊二日を実施。

▼29・30日 根石、美合、緑丘、岡崎、六名、愛宕、生平、秦梨、常磐南、常磐東、常磐、矢作東、矢作北、矢作南の十四校。

▼30・1日 男川、羽根、三

全日本合唱教育研究会岡崎大会

第五回「岡崎のハーモニー」

期日・昭和52年11月23日(水)

会場・分科会 午前9時~12時

中学校部会 商工会議所

小学校部会 勤労会館

全体会と岡崎のハーモニー

午後1時~3時

市民会館

テーマ「みどりと太陽」

講師 作曲家・川渡祥悦

平吉毅州 金光威和雄

名譽会長 内田 喜久

大会々長 鈴木 正弘

島、竜美丘、連尺、恵田、奥殿細川、岩津、大樹寺、大門、矢作西の十二校。

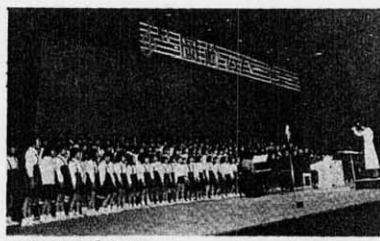
▼1日、2日 梅園、広幡、井田、福岡、竜谷、藤川、山中、本宿、六中部、六北部、六南部城南の十二校。

■研究発表校

十月二十五日・藤川小・主題 子どもの中の学校図書館(学習指導における学校図書館の利用)。

十一月二十九日・葵中・主題 自主性、協力を育てる生徒の育成。

実行委員長 小笠原健治  
※ 日本小中学校合唱教育の核となる研究会である。



第4回「岡崎のハーモニー」のひとこま

# くびなし地蔵



所在地 岡崎市葵梨町矢作揃

「おときさが昼からどっか行ったきり、まだ帰らんげな。」

こないだ、隣部落から嫁いで来たばかりの新嫁さんが、夜中になっても帰らないというので村中は大騒動。聞けば体に欠陥があったとか、姑にいびられたのか夫に冷たくされたのか、悲しさのあまりつい家を出たものの、安否を気遣ってくれる村人の声を追手と感じたか、ついに隣村の小美の溜池に投身してしまった。大正末のことという。下奏梨の遠行橋を渡って西へ

急な山道を登り切ると水田が開ける。山田に沿って進めば峠を経て小美の池、峠を右へとはば栗田道をへて才栗に至る。くびなし地蔵さんはこの峠の辻に静かに祀られている。

事件後しばらくして、はつとこの地蔵をもらいうけて祀ったという。おときさんの冥福を祈ってであろう。

この地蔵は首だけで胴どころか頸もない。だからくびなし地蔵なのだそうである。

●カット

六ツ美南部小

加藤 まち子

## この本を

- 正倉院の謎 由水 常雄 ￥ 1,500  
徳間書店
- 古典の中の女流歌人(上) 監修 梅原 猛 ￥ 980  
教育出版センター
- 土地と日本人 司馬遼太郎 ￥ 780  
中央公論社
- 学習意欲を高める内発的動機づけ 徳島大学附属小学校 明治図書 ￥ 1,900
- トンガ子連れ日記 井上富沙子 ￥ 820  
朝日新聞社
- ひとり立ちした小さいサムライたち 吉岡たすく ￥ 580  
PHP 研究所
- クオリティ・ライフの発想 渡辺 昇一 ￥ 780  
講談社
- 森繁自伝 中央公論社 ￥ 280
- 忘れじの記 「忘れじの記」編集委員会 三河地震記念事業奉賛会 ￥ 1,500
- 岡崎・史跡と文化財めぐり 岡崎の文化財編集委員会 ￥ 600

落ち葉が、校庭のすみをいろどる季節になってきた。掃いても掃いてもたまる落ち葉に、忠実な清掃係は、うんざりしてしまふ。

落ち葉焚く煙のなつかしさを思い、掃き清めた庭にはらはらと落ち葉をまいた利久の故事を思うと、うんざりしたことが恥ずかしく思われるからおもしろい。

市民体育祭、十月十日。  
知った人が走る。教え子が走る。  
しっかりぬかれるな！  
知らず知らず声が出る。  
しらけたまなざしを背に感じた。  
しまった！ここは学区のテントだった。  
しかし、隣組・勤務校・前任校と、  
仕事のせいとはいえ、声援もむずかしい。



「秋の空は変わりやすい」とよくいわれ、女心がひきあいに出される。  
ところがこの秋空も地方によっては晴

天の続く場合も多いらしく、おかしな話である。実は、変わりやすいのは、京都あたりの空であって、一日のうちでもクルクルと天気が変わるのだそう。京都を標準にした「天気ことば」は多いとか。

すみません。ありがとう。働く人へ感謝をこめて言いかわそう。

日ごろは仕事に追われて気づかずにいるのだが、大ぜいの人々のおかげで私は生きている——このところが肝要。

働いてやっている、食わせてやっているなどと思うから、変な戦闘心がわいてきて、人の心にひずみがかかる。